

# 領域「表現」に関する一考察

—羽仁もと子の教育思想に着目して—

川畑尚子

## 1. はじめに

幼稚園教育要領改訂に伴い 2017 年 6 月に文部科学省から教職課程コアカリキュラムが示され、音楽は「領域に関する専門的事項」の「幼児と表現」に含まれることとなった。この科目の目標は、領域「表現」の指導に関する、幼児の表現とその発達について理解するとともに、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などの専門的事項についての知識、表現力を身につけることである。幼稚園教育要領の領域「表現」には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とあり、内容に「(1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、楽しんだりする、(2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」とある。また内容の取扱い(1)には「豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。」とある。学生の表現力を育成するためには、領域「表現」に記されているこれらの言葉を十分に理解する必要があると考える。

筆者は、本学で「幼児と表現」を担当するにあたり、領域「表現」にある言葉を何度も読み、読むたびに羽仁もと子著作集第18巻、教育三十年『人間教育と才能教育』に記されている「風が吹き雨が降る、そのやさしさも物すごさも、正しく聞き分けるようになれば、そうしてそこに興味や親しみや愛着も感じるようになれば、雨の風情も風の威勢もまたその心には一層深く映ってくるのは自然なことです。」<sup>1</sup>という文章を思い起こす。羽仁もと子(1873生～1957没)は日本で初めての女性新聞記者で、後に夫である羽仁吉一とともに人間教育の樹立を志し、自由学園<sup>註1</sup>を開いて幼児教育から大学教育までの基礎を築いた人物である。本稿は羽仁もと子の教育思想から幼稚園教育要領の領域「表現」について、特に音楽に関連付けて考察することを試みるものである。

## 2. 先行研究

羽仁もと子に関連する先行研究は、自由学園の教育や歴史の関連するものや、全国友の

会<sup>注2</sup>に関連したものを含めると多くある。教育に関するものとしては、羽仁もと子の教育思想における「自由」を宗教心に着目して論じたもの（相田，2017）<sup>2</sup>、家庭教育に関して論じたもの（馬場，2015）<sup>3</sup>、また村上は、自由学園草創期に絵画を教えた山本鼎について（2015）<sup>4</sup>、さらに戦時下自由学園の美術教育運動について（2016）<sup>5</sup>論じている。音楽に関しては、菅原（2015）<sup>6</sup>の幼児生活団の設立経緯を明らかにした論文の中に、音楽教育について触れている箇所がある。

### 3. 羽仁もと子の教育思想

#### 3-1. 自由学園の教育思想「真の自由人」「生活即教育」

羽仁もと子（以下もと子とする）の教育的関心は、自身の娘誕生から始まった<sup>注3</sup>。そして次第に「どうにかして何事にも考えさせて小さい時からものの意味というものをその時々々の心にいれてやりたい」<sup>7</sup>という思いと、「昼食はお弁当でなく学校で温かな食事を用意できないか」<sup>8</sup>と考えるうちに、母親としての体験から熟していき、五つのパンと二つの魚が祝福されて 2000 人の食物になるというキリスト教の信仰に支えられ、自由学園を設立した。その理念はまず、昼食づくり、家の内外の掃除、衣類の製作と整理整頓を重視し、生徒が主体的に自己の生活を経営することを学ぶ方法としたこと、次に「自己の生活に目覚めている人は、その接する社会にも真剣な興味を持つ」<sup>9</sup>と考え、生徒の興味と生活を社会に接触させることを目標とした。このように、「よい日常こそ最高の教育なのである」<sup>10</sup>という思想であった。またもと子は、「教育の目的は何ぞときく人があれば、真の自由人をつくりだすことこそ、真の教育の目的であると私は主張したい。自由とは何ぞ、いうまでもなく不自由の反対である。どうすれば人間は自由であるか、どうすれば人は不自由になるか、もし人が神の造りたまいままに、神の力と人の力で生活しつつ育ちつつあるならば、それがたしかに自由人である」<sup>11</sup>と述べている。「学校はその温かさにおいて、子供たちの第二の家庭であり、今の世の中に存在するもっとも優れた社会である」<sup>12</sup>と考え、具体化したのである。

#### 3-2. 幼児生活団から見える教育思想「よく教育するとはよく生活させることである」

1939（昭和 14）年に目白で始まった幼児生活団は、もと子と長女の羽仁説子が中心となって創設された。菅原（2015）は創設経緯を「発足段階から幼児の教育施設という考え方はなく、当時一般的であった幼児教育施設である幼稚園とは異なり、幼稚園令（戦後は学校教育法）によらず、また、有資格者である保母を指導者としてはおかず、カリキュラムも意図的に特定のものは組まずに始められた。それは、もと子と説子が、幼児生活団を幼稚園としてではなく、幼児生活展<sup>注4</sup>での提案を実践してみたいと思う母親が集まればどこ

でも、誰にでもつくりことができる、いわば育児組合であることを提唱していたからである。」<sup>13</sup>と明らかにしている。この幼児生活展は、「その生活からよき頭脳をつくる、その生活からよき人情をつくる、その生活からよき手腕をつくる、その生活からよき健康をつくる、その生活からよき国民をつくる」<sup>14</sup>という5つのモットーの元に開催された。このモットーは「よく教育することとは よく生活させること」<sup>15</sup>というもと子の教育思想に基づいており、現在の幼児生活団ホームページ<sup>注5</sup>の冒頭にもこの言葉が掲げられている。

もと子の子どもにおける教育思想は著作集からも多く知ることができる。「～その両親や周囲の人びとが、赤ん坊自身にさずかっているみずからの力を敬虔な信頼の思いをもっていることから、しぜんに落ちついた気持ちになって、深い愛情と強い理性と現在最高の知識をもって赤ん坊に接するならば、かれらはたやすくその柔らかい生命にそのよい力をうけるものです。子供の教育の一番尊い立場はただそこにあると思います。～」<sup>16</sup>（著作集18巻「おさなごを発見せよ」）。つまりもと子は、子どもが持って生まれた力を信じ、「興味と価値を正しく深く感ずるように導いてゆくこと」<sup>17</sup>が大切と考えていたのである。

幼児生活団のホームページには「幼児生活団の教育で大事にしているのは生活です、家庭での生活も含め、子どもの生活、それ自身すべてが教育と考えています。自分のことは自分でする、自立の心を育みます。元気に遊び、お友だちと力を合わせ日々の生活を通して、自分の弱さや得意なところに気づき継続するちから、忍耐力、克己心を育みます。美しい色や音、自然や命にふれあう豊かな体験の中から、子どもたちの生きる力、感じる心、考える力を育みます。」<sup>18</sup>とあり、自由学園と同じように生活即教育が幼児生活団でもスローガンになっている。幼児生活団は創設から現在も変わることなく、子どもが自分で生活を営んでいけるように、幼児を中心とした小社会を、親を含む大人も一緒に学び考える場所になっている。

## 4. もと子の教育思想から領域「表現」について考える

### 4-1. 人間教育と才能教育「よい目よい耳をつくる」

ここまで、もと子の基本的な教育思想を述べてきた。ここからは著作集18巻『人間教育と才能教育』に着目して、領域「表現」について考えていきたい。もと子は、『人間教育と才能教育』の中で、音の早教育を例にとって人間教育について述べている。音の早教育とは、ピアノの音の高さを音名で言えるようにする、いわゆる絶対音感をつけることである。音の早教育に興味を持ち、実際に幼児生活団でも取り入れたもと子だが、決して子どもの早期教育を推奨しているのではない。なぜならもと子は「いわゆる才能教育は子供の能力の発達を歪める間違った自由教育」と述べており「劣った能力も伸ばすことに骨折り、子供の心と手の働く範囲をできるだけひろげてやるのが、やがて、その広い範囲で子供自

身の心が自由に働いて成長することを助けると考えるのです」<sup>19</sup>と書いている。また『人間教育と才能教育』の中でも「音を聞きわけて興味を見出し得るようになった幼児に、ピアノを利用して絶対音を分からせてやるのは、才能を伸ばすためではなく、よい耳をつくってやるためです。～幼い時からよき教育を基礎にすれば、真に確かに理解され、限りなき興味と深き愛着と、人間の敬虔なるあらゆる至上が動いてきます。」<sup>20</sup>とし、これを人間教育と説いている。よい耳をつくれば、波の音も虫の音にも深い感興を得るようになり、そこに興味や親しみや愛着を感じれば、波の音をきっかけに波と海の関係にも、雲と海の関係にも興味関心が広がっていき、多方面へ繋がっていくと述べているのである。また、音を聞き分けられる人が天地の音の微妙さもわかるように、色の形や美しさを見分ける目を持っている人も同様に、知ることに深くなり愛しみも深くなる、とも説いている。

#### 4-2. 領域「表現」の目指すところ

もと子の教育思想から、「幼児と表現」の科目の目的を考えると、単に歌が歌えたり、楽器が演奏できるだけでなく、その後ろにある“人間教育”という大きな目標を意識することが、領域「表現」にある子どもが「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」ねらいに繋がると思われる。また、幼児の発達を理解して表現活動を通して良いタイミングに良い導きを行うことができれば、物の見方や感じ方が深くなり、統合的に繋がっていくことも考えられる。保育教諭養成課程研究会（2017）のモデルカリキュラムに基づく提案の中でも、領域「表現」が幼小連携の観点で見た時に、幼児期の表現活動が様々な教科に関係する内容を含んでいて、歌詞の内容にとっては『自然との関わり』、リズム遊びでは『数量・図形・文字等への関心・感覚』といった関連から幼児の表現を育てる視点が書かれており<sup>21</sup>、音楽表現が音楽に留まらずに全てに繋がっていくことが示されている。

小島（1998）は、子どもの表現活動について、「表現は周りの事象や事物を感受して形成される子どもの内的な世界を、音・身体・色彩・形・ことばなどの表現媒体を通して形作ることによって、自分の内的な世界を確認し発展させていく行為である」<sup>22</sup>とし、表現は子どもにとって自己認識または自己実現という意味をもっているため現代の子どもに最も必要なものと述べている。もと子のいう“よい目よい耳”を持ち、知ることに深くなれば、表現を通して自己実現や自己認識にも繋がると思われる。

#### 5. まとめ

保育の専門性が言われ、研修・研鑽を積み成長し続ける保育者が望まれる今、出発点である保育者養成校の役割はますます重要になっている。領域「表現」は、音楽、美術、体

育のみならず、導き方次第で科学や哲学にまで広がる可能性があり、切り離して考えるのではなく、全ては繋がっていることを常に意識し、意識することが保育の専門性に繋がると思われる。「幼児と表現」の授業において、領域「表現」のねらいや内容を深く読み、基礎技術だけでなく、広い視野と教養を持って学生指導にあたることも保育の質向上に繋がると考える。羽仁もと子が生きた時代から多くの時間が過ぎたが、その教育思想は現代も色褪せることなく意義のあるものであり、これからも参考にしていきたい。

## 注

1. 1921（大正 10）年に東京の目白に創立される。校舎はフランク・ロイド・ライトが設計した。
2. 全国友の会は、雑誌『婦人之友』の愛読者の組織で、もと子の思想に賛同した女性たちによって生まれた団体である。1930（昭和 5）年に結成された。
3. 著作集 18 巻「素人の教育」に「長女がはじめて小学校にあがった時から、教育の眼が徐々に開かれていった」とある。
4. 幼児生活展は、1938（昭和 13）年に、友の会、自由学園、婦人之友社の協力により企画、制作、開催された。
5. 幼児生活団ホームページ <https://www.zentomo.jp/life/>（最終閲覧日 2019 年 7 月 15 日）

## 引用文献

1. 羽仁もと子「羽仁もと子著作集 教育 30 年 第 18 巻」婦人之友社 1950 年『人間教育と才能教育』191 頁
2. 相田まり「羽仁もと子の教育思想における『自由』－『宗教心』との関係に着目して－」『東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室紀要第 43 号』2017 年、119－130 頁
3. 馬場結子「羽仁もと子の家庭教育に関する一考察－母親の生き方と子どもの生活を中心に－」『淑徳大学短期大学部研究紀要第 54 号』2015 年、81-93 頁
4. 村上民「自由学園草創期（1921 年～1932 年）の美術教育」『生活大学研究』2015 年、26-45 頁
5. 村上民「戦時下自由学園の美術教育運動」『生活大学研究』2016 年、9-25 頁
6. 菅原然子「幼児生活団の設立経緯-羽仁もと子・説子の幼児と母への働きかけ-」『生活大学研究』2015 年、54-70 頁
7. 羽仁もと子「羽仁もと子著作集 教育 30 周年 第 18 巻」婦人之友社 1950 年『素人の教育』3 頁

8. 羽仁もと子「羽仁もと子著作集 家庭教育篇（下）第11巻」婦人之友社 1928年『家庭教育より学校教育を見る』230頁
9. 齊藤道子「羽仁もと子—生涯と思想」ドメス出版 1988年、129頁
10. 羽仁もと子「羽仁もと子著作集 家庭教育篇（下）第11巻」婦人之友社 1928年『生活即教育』24頁 - 34頁
11. 羽仁もと子「羽仁もと子著作集 教育30周年 第18巻」婦人之友社 1950年『教育の目的とその方法』7頁
12. 同上『新しき歌を歌え - 巻頭の言葉 - 』2頁
13. 菅原然子「幼児生活団の設立経緯—羽仁もと子・説子の幼児と母への働きかけ—」『生活大学研究』2015年、54頁
14. 全国友の会編「80周年記念 全国友の会小史」全国友の会 2010年、15頁
15. 羽仁もと子「羽仁もと子著作集 教育30周年 第18巻」婦人之友社 1950年『母のねがい』94頁
16. 同上『おさなごを発見せよ』83頁
17. 同上『新しき歌を歌え - 巻頭の言葉 - 』1頁
18. 幼児生活団ホームページ <https://www.zentomo.jp/life/> （最終閲覧日2019年7月15日）
19. 羽仁もと子「羽仁もと子著作集 家庭教育篇（下）第11巻」婦人之友社 1928年『非天才非凡才』46頁
20. 羽仁もと子「羽仁もと子著作集 教育30周年 第18巻」婦人之友社 1950年『人間教育と才能教育』191頁、192頁
21. 武藤隆代表 保育教諭養成課程研究会編集「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～」萌文書林 2017年、59頁
22. 小島律子・澤田篤子編「音楽による表現の教育—継承から創造へ—」晃洋書房 1998年、1頁

#### 参考文献

- ・秋永芳郎「羽仁もと子—自由教育の母—」新人物往来社 1969年
- ・古谷綱武「教育に生涯をかけた婦人たち」明治図書出版 1969年
- ・齊藤道子「羽仁もと子—生涯と思想」ドメス出版 1988年
- ・内田千春「今、幼児教育の担い手に求められるもの—転換期に考える保育者の専門性と養成教育」『日本教師教育学会[年報第25号]』2015年